

建安詩人による送別の贈答詩について

龜山 朗

一
後漢末の建安年間を中心とする時代が、中國詩歌史にとって劃期的な意味をもっているということは、衆目の一致するところである。ごく短期間のうちに、詩歌の世界は革命的といつてよいほど急速に擴大した。ただちに氣付く顯著な現象は詩人の數がにわかには増大すること、これは詩がようやくその作り手たる特定の個人と結び付けられて享受されることが盛んになってきたことを示している。あるいは、詩歌世界の擴大は、主に個人的な敍情の開拓によつて達成されたとも言

い得る。『詩經』の時代以來續いてきた無記名性を基本的な特徴とする時代が終わりを告げ、詩歌史が新たな段階に入つてゆく、その節目にあたるのが建安時代であつた。

ただ、當然のことではあるのだが、そこに古いものと新しいものとが混在しているということは、充分に留意されねばならない。つまりわれわれはその一方だけを追うのではなくて、古さと新しさの兩方に目を配る必要がある。詩歌世界における新舊の葛藤、その中からある方向性が生まれ、眞の創造が爲されたはずだから。しかしその間の經緯は必ずしも明瞭ではない。漢代初期の詩から讀み始めて建安時代に

入つたとたん詩歌の様相が突然に變つて驚かされるというのが、漢魏詩を通讀する際の私の正直な感想である。だが、變化は斷じて偶發的な突然變異ではないはずだ。そうした觀點からみると、建安詩人が殘した送別の贈答詩は、はなはだ興味ある問題をはらんでいる。一連の送別の贈答詩の背後には、如何なる變化の脈絡を讀みとることができるのか。それを探ることによつて、建安文學史がどのような形で進行していったのか、ひとつの具體例を示してみたい。

本題に入るに先だち、建安贈答詩全體を簡單に整理しておく。

建安文學に現われた新傾向としての贈答詩の増加に關しては、つとに鈴木修次氏が『漢魏詩の研究』の中でさまざまの角度から論じられた。本稿が同書の恩恵に大いに與つてゐることをはじめにお断りしたうえで、まず詩題から贈答詩と判斷される作品を書き並べてみる。

〔A₁〕 王粲：「贈士孫文始」・「贈文叔良」・「贈蔡子篤」。

〔A₂〕 王粲：「贈楊德祖」。徐幹：「贈五官中郎將」。應瑒：「報趙淑麗」。繁欽：「贈梅公明」。邯鄲淳：「答贈詩」。

〔B₁〕 劉楨：「贈五官中郎將四首」・「贈徐幹」・「贈從第三首」。徐幹：「答劉楨」。應瑒：「別詩二首」。曹植：「送應氏二首」・「贈丁儀

王粲「贈王粲」・「贈徐幹」・「贈丁翼」・「贈丁儀」。

〔B₂〕 曹植：「贈白馬王彪」。曹彪：「答東阿王」。

〔A₁〕〔A₂〕は四言詩。〔B₁〕〔B₂〕は五言詩。付記した数字は、若いものほど制作時期が早いことを示す。

これは現存する建安詩全體からみても、やはり軽視できない分量である。もちろんより重要であるのは、そこに建安を代表するような優れた作品が含まれていることなのだ。

制作時期について言うと、當然のことながら、主要な文人が曹丕のもとに集合を完了した建安十六年（二二一）頃から、流行病で多くの文人が死亡し文人集團が事實上消滅する建安二十二年（二二七）あたりまでの間に集中している。すなわち、〔A₁〕〔B₁〕の作品がその期間に作られたと考えられる（以後、その期間を建安後期と呼ぶ）。〔A₁〕はそれ以前の作、〔B₁〕は黄初四年（二三三）の作である。建安贈答詩がいわゆる建安文人集團を母體として生まれたのは紛れもない事實である。

詩型的には、はじめは四言が優勢だが、建安後期になると五言の割合が増大する。建安文人集團の活動期に五言贈答詩の流行があったと言える。ちなみに建安以降、魏から晉にかけても、ひき續き大量の贈答詩が作られているが、ここでは四言の詩型が勢力を盛り返している。贈答詩の世界においては、古風な様式がなかなか侮り難い力を保持し續けているのである。

内容的には、本稿の検討対象である親しい人との別離に際して贈られた詩がかなりの割合を占めている。そしてそれらは四言で作られる率が高い。送別の贈答詩とそれ以外の贈答詩という分類が可能である。

建安詩人による送別の贈答詩について

ところで本稿では、原則として個人と個人の間でやりとりされた詩を贈答詩とみなし、『文選』の「獻詩」に分類されている曹植の「責躬詩」「應詔詩」のような明らかに公的な作品は除いた。しかし、公的か私的かというのはあくまでも程度の問題であって、截然と區別できるわけではもちろんない。ここに列挙した作品についても、一人の相手だけに讀ませることを前提にして作られたと考えられる私信的なものから、一義的には一人の相手に贈るのだが、それが同時に周囲の一定の人々によっても讀まれることを、最初から念頭に置いて作られたと判断される公開性の高いものまで、幅が広い。その幅のなかでの個々の作品の位置づけを試みることは、限界はあるにせよ無意味な作業とは言えない。なお全般的な傾向として、私的性格が次第に強くなっていくのは確かだと思う。

以上を、若干結論をも先どりしながら圖式的にまとめると、おおよそ次のようになる。

〔建安文人集團成立前〕	〔建安文人集團活動期〕	〔建安文人集團消滅後〕
<p>總數は少ない 四言詩が中心 送別の作が中心 公開性が高い</p>	<p>總數の増大 五言詩の増加 送別の作以外にも範圍が擴大する 私的性格の強い作品の増加</p>	<p>總數の減少 「贈白馬王彪」の出現</p>

建安贈答詩隆盛の端緒を開いたのが送別の贈答詩であったと言える。われわれはまず、文人集團が成立する前の作品に注目しなければならぬ。そしてそれが以後どのように受け繼がれていったのか、順

を追つて検討しよう。

二

別れに際して詩を贈るといふことは、中國ではごく普通に行なわれてきたことである。たとえ唐代の詩人であれば、友人との別離にあつて詩を贈らないほうが不自然であつただらう。しかしもちろん、そうした習慣が當初から廣まっていたわけではない。ではそれが何時頃から中國文學の傳統として確立したのかというと、建安時代かあるいはその少し前あたりではないかと思われる。

もっとも、別離の情そのものは、早くから中國詩歌の重要なテーマであつた。『詩經』「邶風・燕燕」は、歸り往く人を送るとき哀惜の情をうたつた詩であり、「小序」では「衛の莊姜、歸妾を送るなり」といふ。また、戰國末期の荊軻の「易水歌」や、『漢書』「蘇武傳」に載せる李陵の「歌」は、送別の宴においてうたわれたもの。あるいは項羽の「垓下歌」も廣い意味で別離の情をうたつた詩といえる……等々。要するに、別れにあつて詩をつくる(うたう)——別離の情を(詩)という様式を用いて表現することは、『詩』が中國に出現したごく初期から爲されていたと推測されるのである。

しかしながら、そのことと、特定の相手に贈るために、(詩)をつくるのとは、やはり作品のレベルとして區別して考えなければなるまい。

一方、送別に(言葉)を贈るといふことであれば、それはもっと古くからの習慣だつたようである。すでに『書經』「康誥」の文が、康叔を衛に封ぜんとして康叔に贈つた(成)王の言葉である。『史記』「孔子世家」には、禮を問ひに來た孔子を送り出すときに老子が、

「富貴なる者は人を送るに財を以てし、仁人なる者は人を送るに言を以てす」と言つたと記録している。『荀子』「大略」にも、曾子を送つたときの墨子の發言、「君子は人に贈るに言を以てし、庶人は人に贈るに財を以てす」が見える。

言ひまでもなく、送別のはなむけとして贈られる言葉は、日常的な發話よりも高次なものでなければならなかつただらう。それは普通の言葉にはない特別なちからを持たねばならないのだから。そしてそのためには、言葉は必然的に何らかの特殊な様式を要求したはずである。かくして、その特殊な様式として(詩)を採用することが次第に一般化してきた、と一應の圖式化が可能である。それはおそらく、もろもろの表現様式の中の詩歌の地位の上昇と並行して進行したであらう。ただし周知のごとく、春秋時代以來中國では、何らかの重大な場面で既成の詩句すなわち『詩經』の詩句を賦して自己の發言に代へるといふ獨特の習慣が定着していた。(ついでに言へば、前出「燕燕」も、「小序」が書かれた時點では、贈られた詩と理解されていたのであろう。それをうらがえせば、その當時、送別のはなむけとして「燕燕」の詩句が賦されていた可能性が高いと言える。)

こうした状況のもとで、送別に際して相手に贈るために(詩)を創作することは、現存する資料で判断する限り、なかなか盛んとはならなかつた。ようやくにしてその最初の大きな成果が示されるのは、曹操の幕下に加わる前、荊州の劉表の下に身を寄せていた(一九二—二〇八)王粲によつてである。作品は、「贈士孫文始」「贈文叔良」「贈蔡子篤」の三首、『文選』卷二十三「贈答」に收められている。いずれも相當な長篇で、幾つかの章に分けられ、それらが有機的につながつて全體を構成している。擘畫『文章流別論』では、「其の文當にし

て整、皆（雅）に近し」と評する。一見相似た三首は、しかし少し子細に讀めば、決して同列には扱えないことがわかる。簡単に言つてそこには古さと新しさが同居しているのだが、詩によつて兩者の割合は同じではない。ここでははじめに、古い要素をより多く留めていると考えられる「贈士孫文始」と「贈文叔良」について見る。まず「贈士孫文始」。

天降喪亂、靡國不夷。我暨我友、自彼京師。宗守盪失、越用遁遑。遷于荆楚、在漳之涓。

(一章)

(天の喪亂を降すや、國として夷びざるは靡し。我は我が友と暨に、彼の京師よりす。宗守の盪び失われしかば、越く用て遁れ遑く。荆楚に遷りて、漳の涓に在り。)

詩は、天下がおおいに亂れたために自分と文始が荆州に避難してきたことから歌い起こされる。作者の視線はまず、自分たちを取り巻いていた周圍の歴史的情況に注がれる。

在漳之涓、亦尅晏處。和通篋墳、比德車輔。既度禮義、卒獲笑語。庶茲永日、無讐厥緒。

(二章)

(漳の涓に在りて、亦尅く晏かに處る。和通することは篋と墳とのことく、徳を比ぶることは車と輔とのことし。既に禮義に度ありて、卒く笑語を獲たり。庶と茲れ日を永うして、讐は厥の緒すら無し。)

ここでは作者の視線は、荆州での平安で満ち足りていた自分たちの生活に絞られる。ここまでは過去の回想である。

雖曰無讐、時不我已。同心離事、乃有逝止。橫此大江、淹彼南汜。我思弗及、載坐載起。

(三章)

(讐無しと曰うと雖も、時は我と已ならず。心を同じくするものを離ち、乃ち逝と止と有り。此の大江を横り、彼の南汜に淹らんとす。我思えども及

建安詩人による送別の贈答詩について

ばず、載ち坐し載ち起つ。)

二人に突然の別れが訪れたこと、つまり現在が歌われる。以上前半の三つの章は敘事を基本とする。

惟彼南汜、君子居之。悠悠我心、薄言慕之。人亦有言、靡日不思。矧伊嬋婉、胡不懷而。晨風夕逝、託與之期。

(四章)

(彼の南汜を惟りに、君子之に居る。悠悠たる我が心、薄か言之を慕う。人亦言える有り、日として思わざる靡しと。矧んや伊の嬋婉をや。胡ぞ懷而たらざらん。晨風の夕に逝かんとす、託して之と期せん。)

ここからはトーンが変わつて敘情性が強まる。すなわち、友人と別れねばならないことに對する送る者の悲しみの感情が表白される。それは前章において若干顔をのぞかせたものだが、ここに至つて堰を切つたごとく吐き出される。

瞻仰王室、慨其永歎。良人在外、誰佐天官。四國方阻、俾爾歸蕃。

(五章)

(王室を瞻仰し、慨として其れ永歎す。良き人は外に在り、誰か天官を佐けん。四國方に阻たり、爾をして蕃に歸せ俾む。)

現在のきびしい情勢のもとでの文始の出發を、間奏曲風に歌う。現實に目を注ぐことによつて悲しみを振り拂おうとするかのようである。これは次章を導き出す役割をも果たしている。

爾之歸蕃、作式下國。無曰蠻裔、不度汝德。慎爾所主、率由嘉則。龍雖勿用、志亦靡忒。

(六章)

(爾の蕃に歸せば、式を下國に作せ。曰う無れ蠻裔は、汝の徳を度わすと。爾の主とする所を慎み、嘉き則に率い由れ。龍は用うることを勿しと雖も、志は亦忒ること靡し。)

ここは文始に對する激勵と戒めの言葉で終始する。

悠悠漚漚、鬱彼唐林。雖則同域、邈其迥深。白駒遠志、古人所箴。允矣君子、不遐厥心。既往既來、無密爾言。

(七章)

(悠悠たる漚と漚、鬱たる彼の唐林。域を同じくすと雖則も、邈として其れ迥く深し。白駒の遠志は、古人の箴むる所なり。允なるかな君子、厥の心を遐くせず。既に往き既に來り、爾の言を密かにする無れ。)

終章。自分たちがいかにも遠く離れてしまふことを再述し、しかし音信を絶やさぬようにという希望を述べて終わる。

これはまことに堂々たる作品、雄篇と稱し得る作品ではないだろうか。詩は過去から現在・未來へと時間軸にそつて進行し、それぞれの章においてテーマは充分に絞られ、それらが無理なく統合されて全體が大きな廣がりをもつた詩的世界を創り上げている。だがそれは何によつて可能となつたのか、この詩の成立の根幹にかかわる手法は何であつたのかといふと、ここで作者が『詩經』の表現を積極的に活用している點を重視しないわけにはいかない。もちろん、作品が先行作品との關係において成立することは言を俟たず、當時の四言詩の場合、第一に關わりを有した先行作品とはほとんど例外なく『詩經』であつた。だがここで私が言いたいのは、その關係の在り方である。つまりこの詩において作者は、極めて自覺的に『詩經』とりわけその〈雅〉の表現を利用してゐるように思われる。そしてもしもこの詩が成功しているとするれば、それは送別の場に臨んだ自らの思いを、周到なる計劃のもとに〈雅〉的表現世界に轉移させ、それによつてより高次の言語として定着し得たからではないかと思ふ。その點について以下でもう少し考えてみる。

全體の構成が『詩經』大雅にある敘事的な詩篇のそれを踏襲するものであることは、改めて指摘するまでもないであらう。なおその際、

一章の最終第八句を二章の起句で繰り返し、以下二章から三章、三章から四章、五章から六章でも同様な技法を用いてゐるのが目を引く(原文圈點部)。いわゆる蟬聯體で、周知のごとく「大雅・文王」等に散見するものだが、作者はその有効性をここで存分に引き出しつてと言えよう。

個々の詩句における『詩經』的表現の使用頻度は非常に高い。それは四言詩の慣習に單純に従つただけとはいへない。それらすべてを檢證するのはあまりに煩瑣であるので、ここではその一端を窺うために四章を見てみる。そこは既に述べたように送る者の感情が一氣に吐き出される部分で、個別的な表現が志向されても不思議でないところなのに、實際は正反對である點、注目されるからである。四章における語彙表現上の『詩經』との關係は、おおむね以下の如くである。

- 「悠悠我心」…「鄭風・子衿」に「悠悠我心」とあるほか、別に「悠悠我思」が四例、「我心悠悠」が一例ある。
- 「薄言慕之」…「薄言」は『詩經』に頻出する。
- 「人亦有言」…「大雅・蕩」をはじめ四篇に五例「人亦有言」とある。
- 「靡日不思」…「邶風・泉水」に「靡日不思」とある。
- 「矧伊嬋婉」…「小雅・伐木」に「矧伊人矣」とある。また「邶風・新臺」に三例「燕婉之求」とある。
- 「胡不懷而」…「胡不」は『詩經』に頻出する。
- 「晨風夕逝」…秦風に「晨風」篇があり、「賦彼晨風」と歌われる。全十句中、作者の感情が表出される部分のほぼすべてにわたつて『詩經』的表現が用いられているということは、やはり特筆に値する。

のではないだろうか。個に最も關わる部分において作者は、個別的表現ではなくて典型的表現を志向しているのである。

それにしても作者は、なぜこうした表現を選んだのであろうか。それを考えるとき、この詩と送別の場との關係を看過することはできない。李善注の引く『三輔決錄』には次のように言う。

士孫萌字は文始、少くして才學有り、年十五にして能く文を屬す。初め董卓の誅せらるるや、父瑞は王允の必ず敗れ京師は居る可からざることを知り、乃ち萌に命じて家屬を將いて荊州に至り劉表に依らしむ。……天子の許昌に都するに及び、董卓を誅するの功を追論し、萌を封じて澹津亭侯と爲す。山陽の王粲と善し。萌の國に就かんとするに當り、粲等各おの詩を作りて、以て萌に贈る。今に于て詩猶お存する也。

この詩が、荊州を離れて新しい任地に赴く文始の晴れの門出を祝うために友人たちが贈った詩のうちの一つであることは、重要である。つまりこの詩は、公開の送別の場において發表されるために作られたものと見なければならぬ。したがってこれは、王粲の單なる個人的な感慨の表明でこと足りる個人對個人の私的なやりとりではなかつた。もちろん根底には文始を送り出す作者個人の思いがあるわけだが、そこから出發して作品となるためには、送別の場に相應しい何らかの實際的な効果をもたらすような特別な「言葉」に仕上げる必要があつた。この詩が四言の詩型をとり、なかならず『詩經』的表現を多用し「雅」のスタイルを襲っているのは、そうした現實的な要求を満たすために作者がとつた意識的な手法であつたに違いない。

次に「贈文叔良」を見る。この作品も、李善注に據れば、劉表に仕

建安詩人による送別の贈答詩について

えていた文叔良が外交使節として益州の劉璋のもとに出發する、その門出にあつて王粲が贈つたものである。

翩翩者鴻、率彼江濱。君子于征、爰聘西鄰。臨此洪渚、伊思梁岷。爾往孔邇、如何勿勳。(一章)

(翩翩たるは鴻、彼の江濱に率う。君子于に征き、爰に西鄰に聘せんとす。此の洪渚に臨み、伊に梁と岷を思ふ。爾の往くこと孔だ邇かなり、如何ぞ勳むること勿からん。)

君子敬始、慎爾所主。謀言必賢、錯說申輔。延陵有作、僑舛是與。先民遺跡、來世之矩。(二章)

(君子は始めを敬む、爾の主とする所を慎め。言を謀ること必ず賢くし、説を錯きて輔を申べよ。延陵(季子)作す有り、僑(子産)舛(叔向)と是れ與せり。先民の遺せる跡は、來世の矩なり。)

既慎爾主、亦迪知幾。探情以華、睹著知微。視明聽聰、靡事不惟。董褐荷名、胡寧不師。(三章)

(既に爾の主とするところを慎み、亦迪みて幾を知れ。情を探るに華を以てし、著かなるを睹て微かなるを知れ。視ること明かに聽くこと聰く、事として惟わざる靡かれ。董褐は名を荷えり、胡寧れぞ師とせざらん。)

衆不可蓋、無尙我言。梧宮致辯、齊楚構患。成功有要、在衆思歡。人之多忌、掩之實難。(四章)

(衆は蓋う可からず、我が言を尙しとする無れ。梧宮に辯を致し、齊楚は思を構えり。功を成すに要有り、衆に在いては歡を思え。人の忌むこと多きは、之を掩うこと實に難し。)

瞻彼黑水、滔滔其流。江漢有卷、允來厥休。二邦若否、職汝之由。緬彼行人、鮮克弗留。尙哉君子、于異他仇。人誰不動、無厚我憂。惟詩作贈、敢詠在舟。(五章)

(彼の黒水を贖るに、滔滔として其れ流る。江漢巻くこと有りて、允に來らしめば厥れ休きなり。二邦の若うか否かは、職として汝に之れ由れり。細たる彼の行人、克く留まらざること鮮し。尙き哉君子、于に他の仇に異なる。人誰か勤めざらん、我が憂を厚くすること無れ。惟れ詩を作り贈り、敢て在舟を詠わん。)

この詩においてもまた、まず目に付くのは非常によく計算された全體の構成である。すなわち冒頭一章では、小雅の「四牡」や「鴻雁」の表現を用いて文叔良の旅立ちから歌い起こして、「如何勿勤」というこの詩の中心テーマを導き出す。續く二章から四章までは、この中心テーマが、より具體的な教え——それを端的に示す句を抜き出すなら、二章では「慎爾所主」、三章では「亦迪知幾」、四章では「衆不可蓋」——として展開される部分である。そして最終五章においても一度、中心テーマを「人誰不勤」と繰り返して終わる。

ここでも『詩經』的表現は隨所に使われているが、より特徴的なのは、それぞれの教えにかかわる先人の言葉や故事を盛んに利用していることである。明の張鳳翼は『文選纂注』巻十で、「此の詩真に〈贈人以言〉の體を得たり」と言う。その評價は充分にうなづけるものである。「〈贈人以言〉の體」——はなむけの言葉に相應しいスタイルは、作者王粲の明確な目的意識によって獲得されたものと言えよう。

三

さて以上二首の王粲の送別の贈答詩は、個人的な敘情とは別種のある實用的な目的に即して作られた作品であったが、それらが漢代には数少ない、文字を介して享受されることを前提とした詩(以後、「書かれた詩」と呼ぶ)の延長上に位置づけられるということは重要だと思

われる。

周知のごとく、漢代詩歌の大部分は、口頭で發せられ音を介して享受されたもので占められている。その主要な例が民間で歌われた歌謠に淵源する作品であることは言うまでもない。しかしそうしたなかで、「書かれた詩」の方も、すでに前漢の時代から制作されている。

朱自清は『詩言志辯』において、(一)「獻詩陳志」、(二)「賦詩言志」、(三)「教詩明志」の順で、漢代以前における〈詩〉の在り方を整理した後、四「作詩言志」として、『詩經』という既成の詩を引用することによるのではなくて、自ら詩を創作することによって〈言志〉を行なうことが、漢代以降次第にひろまっていく様子をあとづけているが、そこに例擧されている韋孟の「諷諫詩」や韋玄成の「自効詩」をはじめとする漢代の作品は、おおむね「書かれた詩」と考えられる。そしてそれら「書かれた詩」と、文字によらず音のみを介して享受された詩とは、作者の意識において截然と區別されていたと理解される。

ただ、時代が下って建安時代に入る前後からは、「書かれた詩」とそうでない詩という區別はあまり意味をなさなくなる。だが、それ以前の漢代においてはそれは本質的なものであったと思う。というのは、現存する作品や資料に據るかぎり、詩を書くということが、漢代では極めて特殊な行爲であったと考えられるからである。たとえば『漢書』や『後漢書』等の史書を通覽すると、建安以前の知識階層の詩創作に對する關心の低さに驚かされる。朱自清の表現を借りるならば、漢代においてもなお大勢としては、「賦詩言志」ないし「教詩明詩」の段階にとどまっていたと言わざるを得ない。

漢代、人はよほどのことがないと詩を書かなかつた。詩を書くためには、それ相當の實際的な理由が必要であつた。ところが建安詩人た

ちによってにわかには大量の詩が書かれるようになる。そのことは當然、後漢の蔡倫による製紙術の改良によって實現した紙の普及と深く關係しているであろう。書寫材料の發達如何は、「書かれた詩」の性格を決定する最も基礎的な條件となつたはずである。そして基礎的條件が變化した結果、建安詩人たちによって書かれた詩が必ずしも從來の「書かれた詩」の延長とはならなかつた——彼らが積極的に自らの作品に取り入れたのは、主に民間の歌謠の成果であつた——のは怪しむに足りない。が、かといつて、建安詩人たちが從來の「書かれた詩」によって培われた傳統をまったく顧みなくなつたのかといふと、もちろんそうではない。それを證する作品が、他ならぬ王粲の送別の贈答詩なのである。

それに關連して、ここで王粲詩以前の送別の贈答詩を一瞥しておきたい。現存する作品は僅かだが、まとまつた形で傳わつてゐる例としては、王粲詩の出現よりほぼ半世紀前に書かれた朱穆（二〇〇—一六三）の「與劉伯宗絶交詩」と、秦嘉（桓帝の時の人）とその妻徐淑との間で取り交された詩を擧げることができる。いずれも書簡に添えて贈られたものである。まず「與劉伯宗絶交詩」（『後漢書』卷四十三李賢注引）を次に示す。

北山有鴟、不潔其翼。飛不正向、寢不定息。饑則木攫、飽則泥伏。饜饜貪汗、臭腐是食。填腸滿嗑、嗜欲無極。長鳴呼鳳、謂鳳無德。鳳之所趨、與子異域。永從此訣、各自努力。

（北山に鴟有り、其の翼を潔くせず。飛ぶに正向せず、寝ぬるに定息せず。饑うれば則ち木に攫り、飽くれば則ち泥に伏す。饜饜の貪汗たる、臭腐を是れ食す。腸を填たし嗑を滿たし、嗜欲極まること無し。長鳴して鳳を呼び、鳳を徳無しと謂う。鳳の趨く所、子と域を異にす。永えに此れ従り訣れ、

建安詩人による送別の贈答詩について

各おの自ら努力せん。）

朱穆は、絶交という重大なる別れにあつた、相手の非を言語として能う限り確實に定着させるために（詩）様式をとつた。そして、作品の具體的方法として、相手を惡鳥である「鴟」になぞらえる寓意的表现で終始させた。（これは劉楨「贈從第三首」と基本的に同じ手法である。）結果として、劉伯宗を非とする朱穆の判斷に普遍性が付與された。それは同じ時に書かれた書簡が相手の非道ぶりを具體的に述べているのとは對照的である。ここでは詩が普遍的レベル、書簡が個別的レベルをそれぞれ擔うことにより、兩者相俟つて訣別の言葉を完結させている。

一方、秦嘉と徐淑の作品は、郡の上計に任命されて都に出向くことになつた秦嘉と、病氣で歸省中の徐淑とが、二度にわたつてやりとりした四言と五言の詩で、計五首が『玉臺新詠』に収録されている。これらの詩については別のところで述べたので詳しくはふれないが、秦嘉が二度目に贈つた三首連作の五言詩は、個別的な事柄に即した敘情を展開し、漢代の作としては特別に目新しく感じられる。

以上いずれも、私的な發言であるという點、從來の「書かれた詩」とは些か異質である。とりわけ個人の感情表現に徹した秦嘉の詩は、從來の枠を打ち破る作品とさえ言える。ところで、そもそもこうした私的な詩が書かれるということ自体、ある程度の紙の普及がなければ不可能ではなかつただろうか。その意味でこれらは、紙の普及がもたらした新しいタイプの詩とみることができるとも知れない。そしてそれが間もなく建安詩の主流となつていくわけだが、そうした新しい動きが逸早く私人の間に認められるというのは興味深いことである。ただ、朱穆と秦嘉の詩があくまで書簡を補うものであつて、文學作品

としての自立性を充分に獲得しているとは言えないという點は、注意しておく必要がある。それに對して王粲の作品が、見事に完結した表現世界を構築しているのは、すでに見たとおりである。

なおその外、蔡邕の作として不完全ながら「答對元式」「答卜元嗣」の二首の四言詩が傳えられており、送別の作か否かは不明だが、公的性格の濃い作品であつたと推測される。だが蔡邕に關して、より注目されるのは、『後漢書』「文苑傳」にみえる次のような記述である。

時に京兆の第五永、督軍御史と爲り、使して幽州を督さんとす。百官大いに會し、長樂觀に祖餞す。議郎の蔡邕等皆詩を賦するに、
 (高) 彪は久ち獨り箴を作りて曰く、……邕等甚だ其の文を美とし、以て尙ゆるもの莫しと爲す。

場面は、王粲たちが士孫文始を送つたときとかなりよく似ていると言える。しかし、そこで發せられた送別の言葉が違つていた。すなわち、蔡邕たち文人にとつて、公けの席で人を送る際に爲すべき平均的な言語行動とは「賦詩」であつたのである。ここで「賦詩」が何を意味しているかが問題だが、おそらくは『詩經』の詩句を賦したのであろう。(自作の詩を送別の場で歌つたとも考えられるが、それならば「作詩」と書かれるのが普通である。)その中で、高彪だけが〈箴〉を發表した。それが評判になつたのは、作品の出來映えもさることながら、そうした場で自作を發表するということ自体珍しかったからではないか。自己主張の時代が始まりつつあつたとも言えようが、ともかくその時期、公的な送別の席で自作の〈詩〉を贈るといふことは、まだそれほど公認されていなかったとみたい。しかしそれにしても、高彪が〈箴〉を作つたのと、王粲が「贈文叔良」の〈詩〉を作るとには、ほとんど徑庭がない。そしてさらにそこから「贈士孫文始」へという展開も

デル(あくまでも理論上のモデルである)を想定することも可能である。

四

さてここまで見てきたところで、次のような問いが出されて然るべきである——王粲は送別の贈答詩によつて前漢以來の「書かれた詩」の傳統を正しく受け繼いだわけだが、さらにそこから一步を進めて、従来の「書かれた詩」の世界に根本的な變化を呼びおこすことはなかつたのかどうか。というのは、王粲の既出二詩は、公開性の高い實用的な文學としての送別の贈答詩のひとつの到達點を示したものが、少し考えればわかるとおり、特定の相手に向けて贈られるという詩の形態は、本來的に、従来の「書かれた詩」にはほとんどなかつた個に關わろうとする傾向をも潜在させていたはずだからだ。その傾向は當然、作者と詩を贈られる者との關係が親密であればあるほど表面化しやすいであろう。實際、秦嘉がその妻徐淑に贈つた詩はそのよい例であつた。しかし、前章で述べたように、それは實は従来の「書かれた詩」の傳統と絶縁し、民間の歌謠につながるを求めることによつて實現したものである。だからそれは變化というよりは轉換と呼ぶべきであろう。その點で秦嘉の詩は、建安五言詩に極めて近いところに位置する。それ故に本當に秦嘉の作であつたのかどうか、その信憑性には若干の不安が残されていないでもない。だが、いま一首檢討を保留していた王粲の「贈蔡子篤」は、傳統的な「書かれた詩」の流れに則しつつも、一方で送別の贈答詩が潜在させていた傾向を引き出した作品として、いっそうの注目に値する。次にそれを見よう。

翼翼飛鸞、載飛載東。我友云徂、言戾舊邦。舫舟翩翾、以泝大江。
 蔚矣荒塗、時行靡通。慨我懷慕、君子所同。(一章)

（翼翼たり飛鸞、載ち飛び載ち東す。我が友云に徂ぎ、言に舊邦に戻らんとす。舫舟翻翻として、以て大江を浜る。蔚たるかな荒塗、時に行くも通ずる靡し。慨として我懐い慕う、君子も同じくする所ならん。）

詩は、荊州から故郷の濟陽に歸ることになった蔡陸字子篤なる人物に贈られた。ここではまず冒頭の〈興〉的表現によって突然に旅立つ子篤の姿を暗示したうえで、その進むべき道のりに思いをよせ、送り出す者の悲しみの情を表明する。

悠悠世路、亂離多阻。濟岱江衡、邈焉異處。風流雲散、一別如雨。

人生賞難、願其弗與。瞻望遐路、允企伊佇。 （二章）

（悠悠たり世路、亂離して阻まること多し。濟・岱と江・衡と、邈焉として處を異にす。風のごとく流れ雲のごとく散り、一別すれば雨の如し。人の生くること實に難し。願いは其れ與ならじ。遐かなる道を瞻望し、允に企ちて伊に佇まる。）

烈烈多日、蕭蕭淒風。潛鱗在淵、歸雁載軒。苟非鴻鴈、孰能飛翻。雖則進慕、予思罔宣。瞻望東路、慘愴增歎。 （三章）

（烈烈たり多日、蕭蕭たり淒風。潛鱗に在り、歸雁載ち軒ぶ。苟くも鴻鴈に非ざれば、孰か能く飛翻せん。進み慕うと雖則も、予が思い宣ぶる罔し、東路を瞻望し、慘愴として歎きを増す。）

二章・三章においても、歌われるのは要するに、友人との別れに對する歎きである。章の進行は事柄の進展をもたらしなさい。ここにあるのは反復であつて（一・二・三章の冒頭部と終結部の表現の類似に注意）、それによつて相手に對する思いが次第に高まつていく。

率彼江流、爰逝靡期。君子信誓、不遷于時。及子同寮、生死固之。何以贈行、言授斯詩。中心孔悼、涕淚漣漣。嗟爾君子、如何勿思。 （四章）

建安詩人による送別の贈答詩について

（彼の江の流れに率うに、爰に逝きて期する靡し。君子の信誓は、時によりて遷らず。子と寮を共にしたれば、生死も之を固くせん。何を以て行に贈らん。言に斯の詩を授く。中心孔だ悼み、涕淚漣漣たり。嗟爾君子、如何ぞ思ふ勿からん。）

最終章においても基調は變わらない。いつ再會できるとも知れない別れに臨んで二人の永遠の友情を確認し、「中心孔悼、涕淚漣漣、嗟爾君子、如何勿思」と感情の頂點で詩は終わる。

この詩が前に見た二首と非常に異なっているということは、ただちに了解されるであらう。ここでは、「贈士孫文始」のように一定の距離をおいて相手と自分のことを視野に収め、過去・現在・未來の順に整然と歌いあげているのでもないし、「贈文叔良」のように理性的に勸戒の言葉を連ねているのでもない。ここでは表現のすべてが、いま現在の別れを前にしての自らの感情表出に収束していく。極めて主情的な作品である。このような情調の相違がまず指摘されねばならない。そしてそれは従來の「書かれた詩」にはあまり認められないものであつた。

先行作品との關係について言えば、ここでも『詩經』の影は濃厚である。全四章の反復的構成は國風や小雅のそれを思わせるし（明の楊慎は『升菴詩話』卷十三で、「大いに變風の思ひ有り」という張九成の評語を引く）、『詩經』の表現も多數利用されている。しかし「贈士孫文始」と比較するなら、『詩經』との關係が決定的なものでないことは明らかであらう。すなわち「贈士孫文始」においては、『詩經』的世界と重ねあわせることが作品の成立の根幹に關わる手法であつたが、ここでは基本的な枠組みと素材としての語彙表現を提供するに留まっていられると思われ。

たとえ三章の前半部「烈烈冬日、蕭蕭淒風」が、「小雅・四月」の「冬日烈烈、飄風發發」をふまえるのは確かだが、そのこと自體にそれほど積極的な意味は與えられていないようである。「小雅・鶴鳴」の「魚潛在淵」をふまえる次句「潛鱗在淵」についても同様であろう。つまりここで『詩經』の表現が使われているのは、あくまでも送る者の感情と映發するような風景を構築する素材としてなのであって、『詩經』的世界に同化させるためとはうけとり難い。

また四章の最後の四句についても、「中心孔悼」は「邶風・終風」及び「檜風・羔裘」にある「中心是悼」を、「如何勿思」は「王風・君子于役」の「如何勿思」を用いたものだが、それらが『詩經』に基づくという事實は事實として、より重要なものは、それらによって作者の感情がストレートに表出されていることだと思ふ。同じことが二章と三章の終りの四句についても言えるであろう。つまりそこで『詩經』に頻出する語句が用いられてはいるのだが、詩表現としての特徴を言うなら、まず第一に、あからさまな心情の吐露ということを描きなければならぬ。

この詩においては、典型への志向が一方に存在することは四言詩の傳統からして當然であるが、同時にそこから離れようとする意欲も感じられるのである。その点とくに注目されるのは二章にみえる「風流雲散、一別如雨」という斬新な表現で（清の陳祚明は『采葦堂古詩選』巻七で、「風流雲散」の八字、飄渺として悲懷たりと言ふ）、こうした詩句が存在するということは、作者に他の誰のものでもない獨自な表現に對する強い欲求があったことを物語っていると考えられる。

以上のような特異性がこの詩には認められる。要するにこの詩は、從來は公的な發言ないしは儀禮的な發言に片寄っていた「書かれた

詩」の世界に、個人的な發言という要素を導入した作品として理解できると思ふ。それを可能にしたのは、贈る相手に對する作者の強い信頼感であつただろうが、いずれにしても、從來の「書かれた詩」の傳統を繼承するという方法によつても新時代の詩歌の主流となる個人的な感情の世界を創造し得るといふこと、しかも當然のことではあるが、「書かれた詩」ならざる民間の歌謠の成果に立つのとは違つたかたちで創造し得るといふことを示した作品として、一定の評価を與えるべきではないだろうか。

五

次に建安後期の送別の贈答詩について見てみたい。王粲詩による高度な達成がそこではどのように受け繼がれているであろうか。

いわゆる文人集團の成立後、五言の贈答詩が急増加することは初めに述べた。その中には曹植の「送應氏二首」・應瑒の「別詩二首」等、若干の送別の作が含まれている。しかし、贈答詩全體に占める送別の作の比重ははるかに小さくなり、結論的に言うなら、贈答詩による新しい表現世界の開拓は送別以外の作品で爲されることになつた。その點に關する詳しい考察は稿を改めるしかないが、五言の送別の贈答詩だけについていえば、次のような事情が指摘できると思ふ。

周知のごとく建安五言詩を導き出した先行作品として最も重要なのは、「古詩十九首」をはじめとする〈古詩〉及び〈樂府〉であつたが、ここではそれら〈古詩〉及び〈樂府〉の主要なテーマの一つに「別離の悲しみ」があつたことに注意したい。たとえば『藝文類聚』巻二十九「別上」を見てみると、そこには「古詩十九首其一」以下多數の「別離の悲しみ」を歌つた五言詩が集載されている。特にその中に蘇

武と李陵の贈答詩が十一首もあって目を引く。それらが實際には蘇武と李陵が作ったものでないことはほとんど定説となっており、おそらくは従来から歌い継がれていた別離の情を主題とする詩が蘇李に結び付けられたり、蘇李の物語に合せて詩が作られたりしたのである。ところでここで重要だと思ふのは、それらには次のような共通の特徴が認められることだ。すなわちそこで歌われるのは、蘇武あるいは李陵という特定の個人とだけ結び付く感情ではなくて、不特定の人間に當てはまるような一般化されパターン化された「別離の悲しみ」だということである。したがって、詩は形の上では一人稱で展開されるのだが、登場人物イコール作者とは考え難い。そうした歌い方は漢代の無記名の詩歌にはごく普通に認められる。それをただちに感情と呼ぶにはためらいを覚える。それらの詩は要するにマイナスの感情を樂しむものと感じられるからだ。つまり詩は遊戯的な雰囲気をごくに漂わせているように思う。

それもひとつの重要な詩の在り方ではある。そして建安後期に活躍した文人たちは、従来は無記名の詩以外にはあまり見られなかった遊戯性を大膽に自らの新作に取り入れることによつて、詩歌の世界を豊かにしている。それが文人集團の成立によつて助長されたものであることは言うまでもない。次に擧げる『藝文類聚』卷二十九にも收められた徐幹の「爲挽缸士與新聚妻別詩」は、その好例だと思われる。

與君結新婚、宿昔當別離。涼風動秋草、蟋蟀鳴相隨。冽冽寒蟬吟、蟬吟抱枯枝。枯枝時飛揚、身體忽遷移。不悲身遷移、但惜歲月馳。歲月無窮極、會合安可知。願爲雙黃鶴、比翼戲清池。

(君と新婚を結びしに、宿昔にして當に別離すべし。涼風秋草を動かし、蟋蟀鳴きて相隨う。冽冽として寒蟬吟き、蟬吟きて枯枝を抱く。枯枝より時に

建安詩人による送別の贈答詩について

飛揚し、身體忽ち遷移す。身の遷移するを悲しまず、但だ歲月の馳するを惜しむ、歲月は窮極すること無し、會合安んぞ知る可けんや。願くは雙の黃鶴と爲り、翼を比べて清池に戲れん。)

前の句の語を尻取り式に歌いつく技巧的なこの詩は、まさにマイナスの感情を樂しむものと言えよう、同様の詩は他にもなお幾つか擧げることが出来る。

建安後期の五言の詩型による送別の贈答詩は、このような環境の下で作られたのである。そこに感じられる軽さは、おそらくはそうした環境と無縁でない。たとえば曹植「送應氏二首其二」(『文選』卷二十一)は次のように歌われる。

清時難屢得、嘉會不可常。天地無終極、人命若朝霜。願得展嬾婉、我友之朔方。親昵並集送、置酒此河陽。中饋豈獨薄、賓飲不盡觴。愛至望苦深、豈不愧中腸。山川阻且遠、別促會日長。願爲比翼鳥、施翮起高翔。

(清時屢しばは得難く、嘉會常にはす可からず。天地は終極すること無きに、人命は朝の霜の若し。嬾婉を展ぶるを得んと願うも、我が友朔方に之く、親昵並び集いて送り、此の河陽に置酒す。中饋豈に獨り薄からんや、賓飲むに觴を盡くさず。愛至りて望み苦だ深し、豈に中腸に愧じざらんや。山川阻しく且つ遠く、別れ促りて會日長し。願くは比翼の鳥と爲り、翮を施べて起ちて高翔せん。)

〈古詩〉的雰囲気の色濃くとどめるこの詩に詩人の切實な感情がそれほど強く感じられないのは、私の偏見だろうか。だがこの詩と王粲の「贈蔡子篤」とを並べてみると、その印象はさらに深くなる。(一般に四言よりも五言の方が感情表現には適していたと考えられているようだが、いまま少し再考の餘地があるのではないか。もちろん兩詩の違いは、別れと

いう現實の出來事の各當事者にとつての重さの違ひに起因すると言えないことはない。しかし、曹植にとつて應氏との別れがより重大なものであったとしたら、曹植ははたして五言の詩型を選ばつたかどうか。送別の贈答詩が一方で必然的にもつことを要求された實用性——親しい人との別れという現實が當人にとつて重大であればあるほど、詩にはその現實と密着した實用性が要求されたのではないか——と、建安五言詩が〈古詩〉や〈樂府〉から受け継いだ〈あそび〉の精神とは、鋭く對立する。

別れの場面を假構してマイナスの感情を楽しむという漢代の「別離の悲しみ」をテーマとする五言詩の在り方は、建安文人集團のメンバーに歡迎されたが、それが彼らの五言の送別の贈答詩にも一定の影響を及ぼさなかつたのである。五言詩が贈られる送別の場もまた、ひとつの文學的サロンに他ならなかつた。(それに對し四言詩が贈られる送別の場は、〈儀式〉の場に傾斜すると言えよう。)そこでの詩に對する共通の認識が創作を支える受け皿としての役割を果たしたことは言うまでもないが、同時に作品の性格を厳しく規制するはたらきをしていたということも忘れてはなるまい。

それでは建安後期における四言の送別の贈答詩についてはどうであろうか。それが建安後期においても引き續き制作されていたであろうことは想像に難くないが、完全な姿で残っている作品としては、邯鄲淳の「答贈詩」がある。全四章三十八句から成り、いちおう「贈士孫文始」型の詩とみなすことができる。その一章十二句の内容に據ると、それは次のようなときに作られた——上命により曹植に隨行していた邯鄲淳は、新たに中央に戻るよう命令を受け、曹植の元を離れることになつた。曹植は淳を餞し、あわせて詩を贈つた。(植の詩は残っ

ていない。)それに答えたのがこの詩である。そして以下二章では、それまでの四年にわたる曹植の庇護に感謝して離れ難い心情を吐露し、三章では新しい任地への期待と抱負を述べ、四章においてあとに残る人の幸いを祝して終わつてゐる。ただ構成に「贈士孫文始」ほどの緻密さはなく、表現もやや平板で盛り上がり欠けるのは、作者の力量の差と言うしかあるまい。それにしても、儀禮に適つた篤實な作品ではある。

思うに、當時の名だたる文人にとつて、この邯鄲淳の詩程度の作品を書くことは、それほど難しくはなかつたのではないか。四言による儀禮の場に相應しい送別の贈答詩の傳統は、すでに文人たちのあいだにしっかりと根をおろしていたと推測されるからだ。

以上が、建安後期における五言及び四言の送別の贈答詩の概要である。見てきた限りにおいて、この時期、王粲の作品を凌駕するものは遂に現われなかつたと言わざるを得ない。

だがやがて間もなく、王粲詩を大きく乗り越え送別の贈答詩の頂點をきわめる、まさに集大成と稱すべき作品が出現する。言うまでもなく曹植の「贈白馬王彪」である。われわれは最後にそれを見なければならぬが、曹植の代表作として名高いその詩については、すでに多數の論及が爲されている。ここではできるだけ重複を避け、それが何故に集大成たり得たのかという問題に絞つて要點のみ記し、小論を締め括ることにしたい。

答えはすでにあらゆる準備されているであろう。これまで述べた論旨をふまえて詩を一讀すれば、第一に重視すべきが、當時の五言詩としては他に例を見ない全體の重層的な構成法であることは明白

である。その淵源は古くは『詩經』にまで溯り得るが、より直接的には、王粲の「贈士孫文始」を代表格とする四言の送別の贈答詩に繫つていて考へるべきである。つまり「贈士孫文始」型の構成をとることによつて、本來は四言のものであつた別れという現實の出來事に密着した表現が五言の詩型によつても可能となり、同時に、「別離の悲しみ」をテーマとする建安の五言詩に往々にして認められた遊戯性が完全に拂拭されたのである。一方、五言の詩型をとつたことは、四言の長編に固有な儀禮性を消失させ、より豊かな感情表現を可能にさせた。その點からすれば、「贈蔡子篤」の延長とも言い得る。すなわち、「贈蔡子篤」によつて示唆された、從來の「書かれた詩」の傳統に添いつつ個人の感情表現を實現するという新しい詩の在り方が、そこではさらに大幅に前進させられているのである。

すでに言われているとおり「贈白馬王彪」には、それまでの詩歌がもつていたさまざまな發想や技法が取り入れられている。しかしもちろんそれは單なる過去の成果の寄せ集めではなかつた。集大成たり得るためには、そうした過去の成果を統合する核を見出すことこそ最重要の課題であつたはずである。それを曹植は、過去の送別の贈答詩の最高の達成である王粲の作品に求めたと思う。その集大成たる所以は、したがつて、王粲詩を基本的な據りどころとしながら、新興の五言詩の表現力を驅使して獨自な世界を創造したところにあると言わねばならない。

なお、それを曹植に可能にした外的要因として、詩人の表現活動を支えていた文人集團がその時すでに消滅していた點にも注意を拂うべきである。つまりそこでは、從來のような送別の詩と送別の場との關係は失なわれていた。だから詩は曹彪一人に發せられたものである。

しかし詩は、現在に到るまで無數の讀者に感動を呼びおこしてきた。それはどういふことなのか。曹彪一人を直接の讀者として展開される表現世界は極限的な状況での發言であるが故にあくまでも個に即したものであつたが、同時にそれが、特定の場を越えた目に見えぬ廣範な讀者との關係をも確保し得る普遍性をそなえた、自立的な作品になり得るのであろう。否應なしに追い込まれた不幸な状況を、詩人は創造のバネとしたわけである。その際に詩人がとつた方法が、文人集團においてはいささか等閑に付されていた「古さ」の價値を積極的に評價し、それに最新の成果を盛りこむことであつたのは、まさに象徴的と言へるのではないだろうか。

注(1) 『古文苑』卷八王粲「思親爲潘文則作」章樞注引。

(2) 『漢書』・『後漢書』を見ると、漢代知識人も公的な意志表明の手段として頻繁に『詩經』の詩句を引用していることがわかる。しかし各傳末に掲げられた彼らの著作の中に「詩」が含まれることは、後漢末期を除くと極めて少數にすぎない。

(3) 紙の普及の問題の重要性については、清水茂教授「中國目錄學(一)——紙の發明と卷子本」(筑摩書房『世界古典文學全集』月報・一九六七年)及び「The Book Form in Relation to Scholarship」(『東方學者會議紀要』No. 33, 一九八八年)に詳しい。また平田昌司氏「紙と印刷からみた漢語史断代」(『山口大學文學會志』第三十九卷・一九八八年)からも示唆をうけた。その三十八ページに次のように述べられている。「紙の普及と前後して五言詩が隆盛にむかい、やがて三世紀建安詩壇の形成をみるのも偶然ではない。必ずしも文字にとどめられなくてもよいと感じられていた様式がメディアの變容により記録の對象となり、正規の場にもあらわれ、それを互いに讀みあう人々が群となるのである。」

- (4) 『後漢書』卷四十三注に引かれる書簡の文章を次に記す。
昔我爲豐令、足下不遭母憂乎。親解縲經、來入豐寺。及我爲持書御史、足下親來入臺。足下今爲二千石、我下爲郎、乃反因計吏以調相與。足下豈丞尉之徒、我豈足下部民、欲以此調爲榮寵乎。咄。劉伯宗於仁義道何其薄哉。
- (5) 拙稿「秦嘉『贈婦詩』の漢代詩としての新しき」(『高知大國文』第九號、一九八八年)
- (6) 朱自清は『詩言志辯』で、秦嘉の詩を「緣情」の五言詩の早期の例だとする。(『朱自清古典文學論文集・上』二二二—二二三ページ。上海古籍出版社、一九八一年)
- (7) 朱自清は「五言詩出於樂府詩、追幾篇——連那兩篇四言——也都受了樂府詩的影響」という。(前掲書二二二—二二三ページ)
- (8) 近時の王樂の四言詩に對する評價は、五言詩に比べて不當に低いのではないかと思う。たとえば吳雲・唐紹忠兩氏の共同論文「試論王樂的詩賦創作」(『天津社會科學』一九八二年第六期)では、「王樂詩的成就主要在五言詩方面。四言詩雖也有成就、但遠不能和五言相比。王樂的四言詩盡管較『詩經』在感情表達上更細膩、語言也更富有概括力、更純熟、但仍可見明顯的因襲的痕迹。他的四言詩還缺乏大膽的突破、只是做了些局部的『改良』」と言われる。同様の見解は兩氏による『王樂集注』(中州書畫社、一九八四年)の前言でもくりかえされる。『詩經』との關係が深いという指摘に異論はないが、だから價值が劣ると簡單に片付けられているのは、承服し難い。
- (9) 『玉臺新詠』卷二による。ただしそこでは魏文帝作とされている。
- (10) 鈴木修次氏も「送應氏二首」について、「別離の哀感が一般的な形で作品の前面に強くおし出されていて、とくに題示されるような特定性を感じさせない」「いいかたや情緒を、古詩その他にあやかっているところがある」「(其二)は、傅李陵の『與蘇武詩』(其二)と、用語

- や情緒を類似させている」と言われる。(『漢魏詩の研究』六三九—六四〇ページ。大修館書店、一九六七年)
- (11) 毛炳生氏は『曹子建詩的詩經淵源研究』(文史哲出版社、民國七十四年)で、曹植の代表作として「朔風」(四言)と「贈白馬王彪」(五言)をとりあげ、兩詩の「詩經」との關連性を精査された。
- (12) 鈴木修次氏前掲書六四〇—六四四ページを参照されたい。
- (13) 同じ時期の曹植に顯著な傾向として四言詩の充實があるということ、ここで想起すべきである。すなわち「賁朝詩」と「應詔詩」は黃初四年の作である。「朔風」の制作年代については黃初四年(二二五)説、太和二年(二二八)説等あつて確言はできないが、ともかくその時期、曹植が(古)をふりかえることによつて詩人としての大きな成長を上げているということは、中國詩歌史を考ふるうえで重要だと思ふ。ちなみに状況がさらに悪化したとき、曹植がとつた最終的な方法は、「吁嗟篇」に見られる寓意的表現であつた。拙稿「漢魏詩における寓意的自然描寫——曹植『吁嗟篇』を中心に——」(『中國文學報』第三十一冊、一九八〇年)を参照されたい。